

第三十四回武蔵御嶽神社奉納俳句入選作品

選者金子千侍

特選

一席 十六夜の月に写して巫女の舞 青梅市田中英子
二席 一日緑攻め込む御嶽山 鎌倉市歌野潤
三席 虫鳴くや薪神楽の闇溜り 青梅市中村和男
四席 秋日差す千年櫛瘤にこぼ 国立市高橋厚
五席 茅葺きの屋根を肥やしに百合の花 国立市中西義昌

秀逸(出句順)

みたけより天地に大きく福は内 新座市長谷川栄
先をゆく御嶽神社の恋の猫 練馬区曾根新五郎
山の気を腹一杯に鯉のほり 横濱市小山勲
拝殿の階段ひれ伏す蟻蛙 練馬区農塚宏道
鑑武者兜を脱ぎて汗を拭く 青梅市阿部秋水
夏霧や全山墨絵神の山 葛飾区小川俊男
からす瓜提げて下りの駅にゐる 飯能市森泉双輪
満月の嶽の神楽に酔う大蛇 昭島市岡島憲
初髪に音立てて切る乗車券 青梅市原島康典
階三百数へて登る初詣 高崎市大山一夫

佳作(出句順)

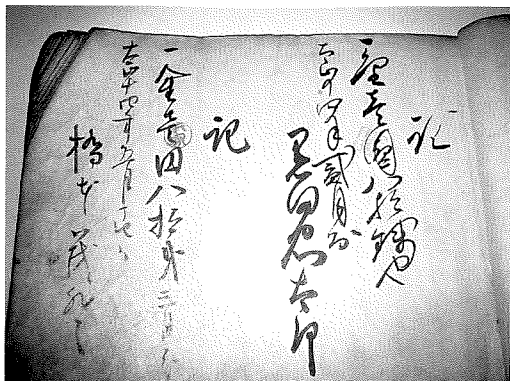
御岳山霧の中より遠郭公 狭山市中野湖月
老鶯や今年限りの草の屋根 羽村市岩波浩吉郎
日の出祭終りし夏霧どつと湧く 青梅市萩原芙沙
舞果てて御岳山に深む秋気かな 杉並区浜田享子
朝霧の櫂の梢に神楽の音 三鷹市大森敦夫
山畑の自慢を並べ大根干 立川市堀江孝晴
リフトには一人の世界もみじ山 飯能市本多華
御師の里こぞりて長き牛蒡注連 青梅市津布久信雄
稜線に煌めく初日湧く歓声 日の出町島崎百合子
どよめきて昇る初日の速さかな 日の出町渡邊敏雄

応募総数 四四二句
選者吟
屋根よりも麦踏み高し山畑

御嶽神社 あれこれ

御師達の集い お狗講

日も沈み、小さな集落に静寂が訪れる。・・宿坊に暖をとっている。と外から草履の音が聞こえてきた。覗いてみると月の照らす中、着物に身を包んだ御師達が一、又一人と歩いていく。何事かと尋ねてみると「今日は、お狗講があります」との事。「お狗講」とは、宿坊に御師達が集まり内神殿に祝詞を奏上しその家を祝う月に一度の祭り、3合枘と祭儀があった事を記す帳面が各宿坊を順番に回る。順番の御師はお狗講を開く日に各家に開催の旨を伝えて回る(現在は宅内放送)。その夜集まった御師達は祭儀を



執り行い、直会をいただき解散する。その宿では祝事とされ、御師達の「おめでとございませう」の祝辞で始め、宿の主人の「ありがとうございます」の感謝の意で締められました。この行事には神社が関与していない。いつ頃から始まったのか、本来何を目的としていたのかも定かではない。なぜ「お狗講」という名なのかさえ推測の域を出ず、長老達に尋ねても明確な答えはない。古い記憶では、祝事としてだけでなく、3合枘を持つて

奉納俳句選評

「特選」

一席 十六夜の月に写して巫女の舞 田中英子
巫女の優雅な美しい舞は、十六夜の大きな月に写されて、幻想的なロマンを漂わせておられます。そして作者は今、篝火の朱い炎の振れの中で、天女の舞を観た想いなのでしよう。

二席 一日緑攻め込む御嶽山 歌野潤

芽吹き了った御嶽山は、日毎に若葉を広げ、ぐんぐん青葉へと変貌していきます。この激しい変化を、緑攻め込むと詠まれたのです。もう作者の心象風景に、したたるような万緑の御嶽山があるのでした。

三席 虫鳴くや薪神楽の闇溜り 中村和男

何基かの薪篝火に、神楽舞台が照らしだされております。この明るさに押しやられた闇は、隅へ寄り集って漆黒の闇溜りを作っています。虫はこの闇で楽しそうに鳴いているのです。さて、この秀句の命となった「闇溜り」は作者の珠玉の造語でした。

四席 秋日差す千年櫛瘤にこぼ 高橋厚

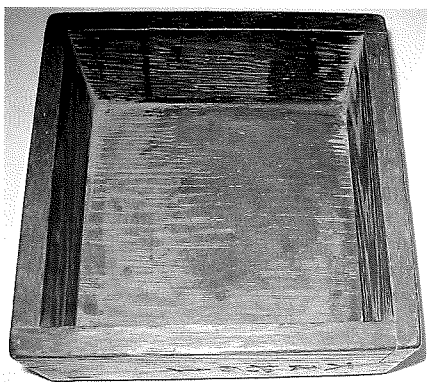
黒い岩石のような巨塊の瘤、これに、こつこつとした猥鼻の子供瘤、瘤がこぼるを生んで途轍も無い年月を持つ千年櫛。磐石の構えで大地を、ふんまえ悠揚とした巨人の風貌。秋の淡い陽の中で、櫛老樹は、神のお姿となっていたのです。

五席 茅葺きの屋根を肥やしに 中西義昌

御師のお家だろうか、永い年月を経て茅葺きの屋根には、枯葉、風塵、土埃などが堆積し、これが良質な土壌となつて百合が芽生えて美しい花を咲かせています。屋根を肥やしに」という絶妙な諧謔に感動いたしました。

第三十五回 奉納俳句募集要項

- 一、作品は未発表に限る
一、受付けは指定用紙にて投句箱へとする
(郵送等直接の受付は致しません)
一、締切りは平成二十年一月十五日
一、発表は平成二十年三月中旬



てお米などを奉納していただく賛助としての役割も持ち、特に直会は情報交換の重要な場だったと口伝される。現在も情報交換の場として重要であるが、明確な地図も無い時代、関東一円の講中を回る御師達にとって、各地の情報や出来事を知る絶好の場だったのであろう。急速な変化を遂げ続ける日本、この小さな山の中でさえ変化して行き、お狗講も段々と変わっていくのかもしれない、しかし今日も20代前後の若い御師達も着物姿でお狗講に集い、先輩御師

達と議論を交わす姿を見る。時は刻まれても、黒く使い込まれた3合枘と茶色に染まっていた帳面は、先人達の作り上げた想いと、御師と御師・人との暖かなつながりを語りかけながら回り続けるのだから。(現存する帳面に残る最も古い日付は大正14年)
※御師 御嶽神社の神職の古称
※内神殿 各宿坊にある神殿で御嶽神社の分社